
スピリットー魂の集う場所ー

穉田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリット―魂の集う場所―

【Nコード】

N3101BA

【作者名】

穉田

【あらすじ】

10年前に突如発生した。悪魔の襲来。それは平和な日本を一瞬で絶望へと変えた。森は荒れ、川は濁り。建物は廃墟と化した。人間達は死線をさまよう。

そんな時に現れたのは聖剣エクスカリバーを使い、精霊を使役し戦う勇者であった。

その者の活躍により、日本は安堵に包まれる。

しかし、悪魔の進行は収まることはなかった。

政府はその勇者に部隊長を頼み、今という精霊重騎士団^{ホーリナイト}を立ち上げた。その者達の戦いにより、悪魔は絶滅した……。と思われた。

それから、10年後。

さらなる戦いが待ち受けていた……。

この物語はそんな悪魔に立ち向かうべく、若いサマナー達が成長していく物語である。学園での笑いあり。涙ありの長編小説！

誤字脱字などがありますので、よければ報告などもよろしく願います。

サモナー

動物には靈魂が宿つていられると言われている。

その魂の形は必ずしも、一つではない。

魂を物理化し、戦わせるもの達がいる。

彼らをサモナー（精霊使い）という。

この物語はそんな、サモナー達が集まる。学院で起こるお話。

校長「ほっほっほ。新入サモナーの諸君。お初にお目にかかる。この聖獣木学園の校長をしておる。早乙女じゃ。よろしく頼むよ。ほっほっほ。君たちはこの難問という門を破り、この学園に入学した。秀才ばかりじゃ。胸を張っていいんじゃぞ。君たちはこの学園を経て、立派なサモナーになれるよう。努力を怠らず、頑張るのじゃぞ。それでは君達の活躍を祈り、この言葉を捧げて。終わりとする。」

校長「自分の未来は自分で掴む。また同じように相手の未来は相手が決める。ただし、困難は付き物。それを助けるのが仲間じゃ。この学園では一人ではこなせないものばかりじゃ。そのために最初の君たちの仕事は仲間。パートナーを作ること。それでは新入サモナーの諸君。また会おう。」

祝いの言葉

僕は今。長々しい校長先生の話を眠い顔を擦りながら、眺めていた。こんなに長い話を聞いたのは久しぶりだ。小学生の頃の校長先生を思い出す。外で集会をするときは禿げた頭がやけに眩しかった。それに比べたら、目の前にいる人は白髪でやたらと髪が長く、ヒゲももっさもっさ。いかにも大長老の精霊使いみたいなオーラを醸し出している。

世の中にはこんなお爺様がたくさんいるんだろうな。と、考えつつ。前を眺めていた。

校長先生の「仲間を作れ」という言葉が耳に入り。長い話がおわった。

「ダチか」

つい言葉を漏らしてしまったが、俺は友達を作るのが下手くそだ。そもそも、人間関係が苦手だ。だから、家から離れたく、この学院の門を叩いたのだ。

サモナーが必要とされている時代ではあるが、俺にはあまり関係ない。普通に精霊が使えるなんて、面白そう。そんな甘い考えで受験して、今に至るわけだ。

教頭「それでは新入サモナー諸君は食堂に移動してください。ささやかなパーティを用意しています。それではAクラスの方から移動してください。」

そういうと、Aクラスの先頭から動き出した。この学園には三年生まであり、Eクラスまでの5クラスがある。クラスわけには意味があるらしいが。Aが決して、強いという訳ではないらしい。

ちなみに俺のクラスはCクラス。周りをみた感じ、いろんな奴がいた。優等生ばかりかと思っただが。茶髪の奴とか、お宅ぼいやつ。そ

れにタイプの女の子もいたりした。これからの三年間楽しくなりそ
うだ・・・。

食堂ではお静かに

教頭先生の案内により、俺たちCクラスは食堂に来た。
到着した後は先輩にテーブルまで案内してもらった。

テーブルはとても長い長机。木で作られているとは思っただけ。
なぜか光っている。魔力でも帯びているのだろうか？
そこまで魔術とかに詳しくない俺でも見える。

案内してくれた先輩に聞いてみたところ。これは普段から魔術に慣れるために作られているらしい。

ここだけではなくて、至るところに魔力で生成された物があるらしく、すぐに慣れると言われた。

席に座っていると、隣にタイプの少女が腰掛けた。ショートヘーとロングの中間辺りの髪型に少し髪の毛に茶色が混じっている。
顔も整っていて、胸もそこそこあった。

「や、やべ！可愛いかも・・・。」

女性との交流もなかった俺にトークを繰り広げることなんてできない。自分の情けさに腹が立つ。せっかくのチャンスがー！

「あ、あのー」

隣から可愛いらしい声が聞こえた？

俺は恐る恐る、少女を見た。

横姿から見たとおり、とても可愛い子だ。

緊張のあまり、俺はなかなか声を出せなくなっていた。

や、やばい！なんて、話たらいんだ！！

「き、聞こえてますか？」

「は、はひ！」

し、しまった。声がうまく使えねー！

こんな時はどうしたらいいんだ。

と、そんな時に俺の前の席に一人の男性がやってきた。

「すまん、うちのダチが。そいつ、会話苦手なんだわ。許してやってくれよ。」

こいつの名は西城明^{さいじょうあきら}。俺の唯一の友達。引ッ込み思案だった俺に剣道部という部活を紹介してくれ。色々、手助けしてくれる良い奴だ。

「あ、アキラ・・・サンキュウー」

こんな時でも頼ることしかできないのは情けない・・・。

明は目で合図を送り、俺にまかせると、言おうとしているように見える。

まあ、俺にはこの状況は打破できないので、まかせることにした。

「お初っす。俺、こいつのダチやってます。西城明います。で。こっちは西口隆。西つながりっす。君の名前はなんて言うの？」

さすが、明。こんな状況でも巧みに言葉を操っている。

「はい。私は西島明奈と言います。偶然にも西つながりですね。」

につこり笑った、西島さんの笑顔は素敵で、その気品あふれる姿に俺は目を奪われていた。

「お、偶然っすね。今後ともよろぴくっす。」

「ぴくっす、て・・・。」

少女はクスクス笑いだした。

こんな子と一緒にクラスとは。感激だ。

「隆、そろそろ。しゃべれるか？」

明は俺の性格をわかっていた。たしかに自ら喋るのは苦手だが、途中から介入する分には大丈夫なのだ。ようは自発的言動が苦手なのだ。

「あ。どうもです。西口隆です・・・。よろしくな。」

「あ。はい。こちらこそよろしく願います。」

なんとか会話は交わせたが、練習しなきゃだな・・・。

へ。こんなに施設があるんだ。

その後、俺ら三人は楽しくわいわい、喋っていた。途中から、明奈の知り合いである、守口寛子が乱入してきた。性格は明と似ていて、かなりのムードメーカー的存在。明と寛子は二人で喋り出し、俺と明奈はその話を聞くだけであつた。

食堂に到着して、約20分が過ぎた頃。一人の女性職員が食堂の一番にある台に登っていた。そこにはマイクが設置されており、それに気がついた数名は話すのを止め、前を向き始めた。うちのグループは目も触れず、話すのをやめなかつた。

「お静かに。新入生のみなさん。初めまして、この学園の施設長をやっています。篠原明美です。」

改めて、皆さん。ご入学おめでとうございます。今後の活躍を期待しています。

ええ。只今の時刻は5時50分。今から10分間、施設についてのご説明を簡単にしますので。耳をこちらに向けるようお願いします。」

今からお世話になる家でもあるしな。校長先生みたいに長話にはならなそうだから、聞くことにしよう。喋っていた二人も真面目に前を向いているようだし。

「では1つめ。この学院の敷地内からは出ることは禁じています。外出届けを出した者のみにだけ許します。この学院を出て、右のほうに行くと、大型のショッピングモールが建てられています。衣料品・食料品・魔力品など。必要な物はそこで補充してください。

2つめ。学院の左側をずっと真つすぐ行くと。精霊の木があります。

ここへは立ち入らないでください。

3つめ。この学院を真つすぐいくと。様々な施設があります。基本出入りは自由ですが、新入生の皆さんは先輩が同行の元お願いします。寮への移動は先輩達に案内をお願いしていますので、心配なさらないでください。

そして、最後にこれは重要なことなので、しっかり聞いてください。皆さん、ご存知だとは思いますが。悪魔の襲撃なども考えられます。悪魔は魔力を感じるとそこに群れて来るという習性があるので。普段は強力な結界が張られていて、悪魔は来ませんが、もしも。侵入してきた場合。全ての建物が赤色に変色するよう作られています。そうなった場合。この食堂に集まってください。

これはお願いではなく、命令ですので肝に銘じてください。以上です。」

そういうと、施設長は台から降りて、所定の位置へと向かっていた。

ここの敷地内に入ったときは建物の量に驚かされて、気絶しそうにもなった。まあ、こんだけのサモナーを育成するには当たり前か・・。

木の根は食べれますよ

施設長の話が終わると、台に一人の料理人らしい服装をした人がのっそりとやってきた。恐らく、料理長と思われる。

「新人生諸君。入学おめでとう。料理長の早乙女源郎じゃ。源さんともよんとくれ。では、さっそく。お腹がすいてきている時間ではあろうし。食事のタイムといきたいと思う。」

源さんという人はいかにも料理を何年もしてきたという感じの人で愛着が持てる。料理は運ばれてくるのだとは思うのだが、周りの人を見ると料理人は5・6人しかいなかった。

こんな、たくさんの方の料理を作るにはもつといってもおかしくないとは思っただけだな・・・。

それにどうやって、テーブルまで運ぶんだろうか？

「それでは諸君。目の前のテーブルに注目するんじゃ。」

俺は目の前を見た。

「おー。この目の前の木のテーブルが夕食かー。いただきまーす。」
もしかしたら、食べる木で出来ているかもしれない。ではかぶりついてみるか・・・。

「あーん。・・・。」

歯がごりつと言った。

それを見ていた、明奈がマネして。目の前の木のテーブルを一口。

「か、かちやい・・・。」

「こ、こちら。明奈！これは食べ物じゃないって、それに明！！あんたも見えてないで、隆君を止めてよ！」

さつきまで騒いでいた寛子が慌てて、俺等を止めようとしていた。恐らく、このメンバーの中では唯一の常識人だと俺は思った。

「あ、あんたら。これが食べ物だって、なぜ思えるのよ！！とりあらず、前向きなさい、源さんのほうをよくみなさい。」

言われるまま、前を向くと。源さんが手を合わせている。何かを詠唱しているようにも見える。

食事前のお祈りだろうか？

すると、源さんの後ろから、なにやら金色の色を纏った影が出現し始めた。

「ヤム・カアシユよ。我ら同士に寛大な恩恵を・・・。」

影から物理型に変わっていた。その姿はトウモロコシの冠をした若い青年の姿であった。

これはマヤ神話にでてくる農業と自然の神とされている青年だった。ここに入学するために一般的な精霊の勉強はしていたために理解することができた。

源さんが詠唱を終えると、続いて。周りにいた料理人達が詠唱を始めた。すると、同じように影がでて、物理化していった。

「彼らに恩恵をオオゲツヒメ！」

「我らに祝福をカーバンクル」

次々に精霊を召喚している。どれも、高霊と言われる。契約が難しいとされている、精霊ばかりであった。料理人ではなく、本物のサマナーでもあるのだろう。

全員の精霊が終わると、当たりを見回し、源さんが頷いた。

「ユニゾン・ハ食」

両手を上げて、神に大して慈悲を求めるような体勢をしていた。すると、空からキラキラと雪のような物が食堂を包み込むようになってきた。

「きれい・・・」

明奈は空を見上げて、今にも泣き出しそうな姿を見せていた。あまりにも綺麗で俺も泣き出しそうだった。

そんな俺達が空に目を奪われていると、テーブルが光り出した。そして、いろんな食べ物が出始めた。

どれも今まで見たことがないような物ばかり、恐らく。この料理たち魔力の帯びているのだろう。

しかし、なんと旨そうなんだ・・・。ヨダレがでそうなほどだ。

「では新人生・在学生の皆さん。テーブルに手を置いてくれたまえ。」

俺達は今の現実を受け止めるのがやっとで、なんだかわからないまま。テーブルに手を置いた。」

「ヤム・カアシュよ。彼らに器を。」

源さんが精霊にそう頼むと、いつの間にか俺らの手にコップがあった。

いきなりなので、驚いて。椅子から落ちて、尻餅をついている人もいた。前の席にいた、明の目が泳いでいる。かなり、ぼーっとしている。

「それでは動揺している人もいるが。乾杯!!」

源さんの号令とともに入学初日の夕食が始まった。

食事はゆっくりね

「う、うまい。こ、これも!」

明はテーブルにある、マジカルフード（魔法の食べ物）を口にほうばる。顔が饅頭みたいに膨らんでいる。

「明。そんなに口に放り込むと、喉に詰めるぞ。」

「おう。わかった。」

何を言っているのか理解不能だ。明はすでに自分の器に入っていた、魔水を飲みきっていた。

俺はそんなにのどが渴いてないことだし・・・。

「ほれ、これ。これ飲んで落ち着け。」

「もにゅもにゅ。」

もにゅもにゅ?

隣からケラケラ笑い声が聞こえる。明奈が吹いた。

「ふふふ。あはははは。もにゅもにゅー。」

「あ、明奈。どうしたんだ!？」

こんなに笑ってる明奈もまた可愛い。可愛いんだけど・・・。めっちゃ、むせながら笑ってる。喉にでも詰めたんじゃないだろうか。

「こ、こら。明奈、落ち着きなさい。」

寛子が自分の魔水をなんとか飲ませようとしていた。まるで、明奈の保護者だ。

「この子。変なところでツボるから。気にしないでね。」

たしかにツボの入りどころが、変だ。しょうもないことでも笑えるとはある意味、天が授かった力だな。でも可愛いから許す！もう、俺は心に決めた。この子を彼女にしてみせる！

「お、おい。隆！これ食ってみろよ。見た目はグロいけど、中身はぷりぷりで外はふわふわ。めっちゃうまーぜ。」

明が勧めてきたのは食べ物ではあるのだが……。見た目は目ん玉のように見えなくはない。これがふわふわで中身がぷりぷりな訳がない。

「あ。遠慮しておきます。」

「んな、こと言うなよー。いいから、いいから。」

口に無理やり入れようとしている、男にされても嬉しくない。しかし、モノは試しだ。

「い、いただこう……。」

俺は口を大きく開けた。臭いはそこまで生臭くもなく、いい匂いがしてくる。綿菓子とプリンを重ね合わせたような臭い。甘い砂糖の臭いがする。

パクリ！

「……。うまい。うまいぞ、これ！」

「だろだろ、次はこれ食べ。次はこれな。次は！」

永遠のループが始まった。俺たちは二時間永遠に食を楽しんでいた。もう腹はパンパンだ。こんなに食っても、腹が痛くならないのは食物にはいった魔力のおかげであろう。同時に体に魔力をいれたことにより、たぶん。ただの一般人から魔術師にはなれただろう。魔術師になるのは簡単だ言われている。ここからが厳しい世界。精霊を使役。それを召喚、時には武器化して、戦う。

最初の話であった、精霊の木というのは恐らく。精霊と契約する場所ではあると思われる。

自分がどんな、精霊契約するのか楽しみだ。剣道が得意だから、剣に武器化できる精霊がいいな。

腹も満腹だし。そろそろ、寮への移動かな？

寮は共同なんですか・・・

楽しい時間はすぐに過ぎていった。時間を忘れるというのはこのことを言うんだらうか。

今回の催しは毎日あるわけではないらしい。普段はこの食堂で料理を注文するもよし、ショッピングモールで食料を買って、自宅で作ってもいいらしい。基本フリー。

料理の実力は自信があるので、家で料理することにする。それでたまに食堂で食事をする。お金の都合とかもあるしな。

明日は入学生のために休みをとっているらしく、敷地内の見学などが許されている。

先輩との移動が原則だが、別に変なとこにいかなかったら。一人で行動してもいいらしい。これは先輩から聞いたもので、悪い先輩もいるもんだね。

明日は敷地内の探検に一日費やして、潰れるから。今日はゆっくり休むことにする。

早く、寮に帰って寝たいもんだ。

そんなことを考えていると天井のスピーカーから声が聞こえた。

「えー。そろそろお開きにしたいと思いますので、Eクラスから順に寮の方へ移動してください。入浴時間は12時となっております。消灯時間などは設けておりませんので、自分のペースでこれからの行動をしてください。それでは移動してください。」

スピーカーから声がなくなると、先輩の案内でEクラスから移動を開始した。

寮だから、消灯時間などはあるのかと思っていたが、自由なのは嬉しい。自由性の高い俺にとっては、ここは天国だ。

「それではCクラスの人は私に付いてきてください。」

ロングヘアーで黒髪先輩が俺達の案内を務めてくれるようだ。食堂を出て、すぐに玄関なので少し寒い外へ俺等は出た。

季節は秋。少し肌寒くなっているが、そこまで寒くはない。男共にとつたら、ちょうどよいぐらいなのだ。学園を出て、右に移動している時思ったが。女子寮と男子寮はわかれていると思うのだが、一向に分かれる雰囲気はない。もしかしたら、男女共同の寮なのかもしれないな。さすがにそれはないと思うんだけどな……。

5・6分歩いていると巨大なマンションが何個も設置されていた。マンションの入口にはA～E文字が書いていた。どうやら、クラスごとに振り分けられているようだ。

「それでは自分のクラスが書いてあるマンションに入っていくてください。」

Aクラスの案内をしていた先輩が全クラスに対して、喋り出した。

俺は流れに身を任せて、Cクラスのマンションに入ることにした。入口を抜けると、目の前にはかなり広いフロアがあった。外側から見たら、わからないが、マンションの中はめちゃくちゃ広い。魔術で建設されているのだろう。外見では想像できない。中に入って初めてわかる。

やばい、興奮してきた。

玄関に入ると靴を脱ぎ、下駄箱があったので。靴をなおして、フロアの中央へと集合した。

ここで寮の説明があるのだろうか？

一人の年老いた老婆がゆつくりとこちらへ迫っていた。推定年齢は80際ぐらいにみえる、白髪は目立ち。シワもそれなりにある。

「どうも。このCクラスの寮監をしている、島田ヨシコじゃ。ヨシコとおよび。それではさっそく。部屋決めをしたいのだが、ここで恒例行事をしたいと思います。部屋は一人部屋でこのマンションは71階建てとなっている。部屋は60階まであって、その上はトレーニングルームや温泉場。生徒に役立つ施設が設けられている。それはさておき。60階のうち2階、20階までは3年生。21階から40階までは2年生。そして、41階から60階までは一年の部屋となる。女子と男子は分けてないから、理解しておくれ。部屋は自由じゃ。早いもん取りスタートじゃー。」

・・・無言な空気が流れた。

「へ？」

誰も動こうとはしない。まあ、無理もない。いきなりすぎて、どういふ行動を取ればよいかわからないのだ。さて、どうしようか・・・。」

「よっしゃ！！隆。60階だ！！走れ！」

明が俺の肩を叩いて、近くにあつた階段へ走り出した。

「お、おう。」

それに合わせて、俺も集団から抜けた。それと同時に集団は崩れ、一斉に走り出した。

「うおおー！！俺も60階だ！！」

「私は50階ぐらいがいいわ!」

争奪戦が始まった。

俺たちは今、トップを走っている。さりげに明奈と寛子も同行しており。60階を目指している。

階段を上り。10階の数字が見えた。

まだ、10階か。結構きつい。後、50階も登るのか、足がつれ!

したを見ると、数名は見えるがさきほどいた人数ほどはいない。階段はいくつもあったの分離したのだろう。もしかしたら、階段になにかしらの魔術が施されていて、俺らはその登りにくい階段を登ったのではないか。よく考えると、登り出した時から何か変な重力を感じる。

「やられたな!」

そう思いつつも、30階を過ぎた。

明奈の息が少し乱れているように思えた。寛子の方はどうやら、スポーツ系らしく。息一つ乱れていない。前の学校では恐らく、エース的な存在であっただろうな。

明奈が心配だからペースを落とすかな。

「明奈。大丈夫か?」

「へ、平気だよ……。はあはあ。」

つらそうだな。心配症の俺は36階で休むことにした。もしかしたら、ほかの階段があり楽に60階までいくことができるかもしれない。

「明。この階段はハズレだ。ほかの階段を探そう。」

そういうと俺等は一息。36階で立ち止まった。36階の中央にでると、これまた広い。これ寮か？そんな疑問も抱きつつ、ほかの階段を探した。汗をかきつつ。辺を見回す。

そんな姿を見ていた、さきほど案内でCクラスの最後尾を歩いていた。三年生の男性の人がこちらに歩み寄ってきた。

「ははは。疲れたか？」

「あ。はい。それに女子に無理はさせられないし。」

俺は率先して、先輩としゃべった。明は階段を探している。女子は近くにあった、椅子で休息をとっていた。

「男だな。気に入った。あっちの階段から行ってみな。」

そういうと中央から左側の階段を指した。よく見ると、ワープと上に書かれている。

どうやら、一階以降にはこれが書かれているようだ。俺らが登っていた階段を見ると、重力と書かれていた。やっぱり、そういうことか。

「じゃあ。頑張れよ。」

先輩はそういうと近くにあった、部屋に入っていた。

休息している二人を呼び、先輩が言っていた。階段へと急ぐ。

見た目は普通の階段なんだけどな。

取り合えず、登り始めることにした。すると、どこからともなく、

機械音が聞こえた？

「何回を希望しますか？」

どうやら、案内してくれるようだな。

「60階。」

すると、いきなり、目の前が光だし。気がつくと、60階の数字が目の前にあった。

いそいで60階に中央に立つと、2・3人の男がいた。どうやら、先をこされたようだ。

「チックシヨー。先をこされたー。」

隣で明が悔しがっていた。明奈と寛子はさきほど休憩していたので、疲れてはいないようだ。

取り合えず、部屋を選ぶか。

たくさんありすぎて、どれを選べばよいかわからない。これが一年間の部屋になるわけだから、慎重に選ばなくては。できれば、日当たりがよく風通しが良い部屋がいい。しかし。今は夜なので少しわからない。

「風通しのよいところにいこうか・・・。」

俺が歩き出そうとしてきた時。明奈が俺の手を引張た。

「仲良くなれたんだから、皆。近くの部屋にしよう。」

につこりした明奈の笑顔に負けて、オレらは近くの部屋に固まることにした。俺としては嬉しいが、男女が近くの部屋って、大丈夫なのか心配だわ。一応、健全な男子なんだし。

そして俺たちは60階に中央を右に行つて、隅っこの部屋を獲得し

た。

一番、隅っこから。俺・明・寛子・明奈の順番だ。

部屋の間の感覚は結構あって。ありがたい。近すぎるのもどうかと思っし。

部屋の入口には手をかざす指紋認証装置みたいものがあつた。どうやら、鍵は必要ないらしく。手をかざすだけで部屋に入ることができらしい。

「便利だな」

部屋の前に立つと、小さい精霊みたいなのが現れた。

「ここに手をかざしてね。」

こんなところでも精霊の力を使っているのかと思うと関心だ。明の方を見ると、あっちにも俺の目の前にいる精霊が現れていた。よしこさんの精霊かもしれない。

精霊の言つとおり俺は手をかざすと。なにか、解析をしている。精霊の目が赤くひかっている。

「解析終わり、入っていいよ。」

そついうと精霊は姿を消した。この寮の守護霊でもしているのだろうか？

部屋の中に入ると、真っ白い壁に。ふわふわのベット。窓が空いており、外から涼しい風が流れていた。そして、部屋の真ん中にダンボールがあつた。恐らく、家から送った荷物だろう。

本当に寮だよな……。

お風呂？

今、俺は荷物を整理していた。家から送ってきたのは生活で必要最低限の物で、そこまで部屋が荷物で溢れかえらずに住んだ。前まで住んでいた家はもはや、ゴミ屋敷なので。これを期に生まれ変わることにする。必要な物は明日、ショッピングモールで買いに行くことにする。

大型というほどだから、それなりの物は揃っているとは思ってから、どんなものがあるか楽しみだ。

ちなみにこの学園にもバイトというのがある。店などで店員として働くこともできるがそれは学外とは変わらず当たり前のことだが、この学園ならではの悪魔と戦うことだ。ようするにクエストというやつだ。

クエストは全員が受けれるわけではない。危険と隣り合わせなので、力ない者は受けることができない。受けるためには承認試験がある。とても難関な試験をこなし、その合格者のみに与えられる。

バイトとは桁が違うぐらいのギャラが入る。いずれは俺もこの承認試験を受けるつもりだ。

なんでって？楽しそうだから。

今の時間は10時。そろそろ、入浴しようと思うのだがどこにあるのであろうか？やたら、広いからな。

そんなことを考えていると。部屋の真ん中にさっきの精霊が出てきた。

「整理はできたかな？そろそろ。入浴したい者がいると思うから、簡単に説明するね。まず、君たちがいる部屋の入口のドア。それは

ただのドアではない。外側にあったように中側にも指紋認証装置み
たいのがあるだろ？それに手をかざして、行きたいところを言えば、
移動することができる。これはこの寮内のみ有効だからね。歩いて
行きたかったら、階ごとのフロアにあるマップを見て、移動してね。
後。明日は起床放送はないから、自由に行動してね。明日以降は時
間になると僕が起こすからね。じゃあ。またね。」

伝言が終わると、一瞬で姿を消した。これが朝っぱらからいると少
し気味悪いかもな。

「さて、風呂いくか。」

俺は桶やタオル。シャンプーなどを用意して。さきほど言われた、
指紋認証装置を使うことにした。

「えっと。手をかざして。ふ、風呂場のお願いします……。」

……。何も起きないな。もういけるのかな？開けたら、崖の上と
かやめてくれよな。でも、まあ。この学園の機能はすばらしい。否
定を肯定にしている。信じるぞ。

ガチャ。

「お！おおお！」

扉を開けた先には広い大浴場が広がっていた。全員が入っても混雑
しないような感じの。逆に広すぎないかも心配だ。少し、混浴なん
かがあったらなー。と、期待して俺が馬鹿みたいだ。でも、もし
かしたら。こんなに広い寮のことだから、もしかしたら。あったり
するかもしれない。また探してみようか。

「さて、入るか。」

今の時間はさほど混雑はしてなかった。いや、こんなに広いのだから仕方ないか。

明はもう入っているのかな？行動が早い、あいつのことだから。もう入ってるだろうな……。

「よお。隆！おせーぞ！」

そこには既に入浴を済ませて、タオルで体を拭いている明がいる。

「相変わらず、はえーな。」

「お前が遅いんだよ！後で部屋いくから待つてろよ。」

来るのかー。俺はもうねたいのだよ。行っても聞かない奴だから、鍵を閉めておこうか……。

そして、明は風の如く去っていった。あいつは剣道に関してもだけど、日常がスピーディーだった。

あいつについていける奴はいるのだろうか？

そんなことを考えながら、入浴場の扉を開けた。

しかし、もう驚かないぞ。慣れたからな。いちいち、驚いていると身が持たねー。

「あー。広いな……。」

予想通り広い。普通の温泉の何倍もの大きさだ。

温泉の種類もいくつもあり、ヒノキ湯・ジャングル風呂・五右衛門風呂。この地球上の温泉を集めているのか。有りすぎて、どれに入

っていいか迷う。温泉好きの俺にしたら、これはありがたい。

風呂のなかでも好きなのはやはり、露天風呂かな。あの涼しい風にあたりながら、風呂に入る。最高の贅沢と言える。五右衛門風呂で露天風呂は得に好きだ。

俺は露天風呂への扉を開けて、屋外へと向かった。すると、露天風呂はあまり人がいないようだ。あまり、人気がないのだろうか？こんなに絶景だと言うのに。最近の若者ときたら、歴史をかんじれる奴はいないのか。

「でも、人は居ない方がありがたいな。」

露天風呂は1つだけあった。もしかしたら、ここでも魔術が働いたりしているのだろうか？入浴者の心を読み取ったのだろうか？本当にすごいな。

良い感じに湯気がでている温泉に俺は少しずつ入っていた。月が湯船に写って、とても綺麗だ。ここが混浴だったら嬉しいなと思うたりもしてしまう。

「あー。極楽。」

そんな年寄り臭い言葉をこぼしながら、俺は1時間近く露天風呂を楽しんだ。明日は屋内の風呂も試してもいいかもな。いろんな種類のがあったから、また楽しみが増える。

風呂を済ませて、俺は部屋に戻った。

良い子は早寝早起き

時刻は深夜0時を回った。俺はというと、部屋に集まった奴らを追い出そうとしていた。

風呂から出て、部屋に戻ったのはいいが。それから数分して、明がやってきた。追い返すのもかわいそうし、少しの間だけ居させてやることにしたのだが。二人では寂しいと主張し。明奈と寛子も呼ぶことになった。

俺は眠い目をこすりながら、こいつらとトークを繰り広げていた。

「へー。二人共、剣道やってたんだ。すごいなー。」

「だろ？隆はかなり強いぞ。うちの部の奴は誰一人敵わなかったもんな。」

どうしてか、高校時代の部活の話になっていた。

明奈はテニス部。寛子は陸上部だそうだ。サマナー志望って言うても、一般人ばかりだ。

ここの入学試験というのはたしかに学力も必要とされるが、それ以外も必要とされている。そこまで頭が良くない俺や明が合格したのは今だに謎だ。恐らく、才能でもあったりするのではないだろうか？

「へ。隆君って、そんなに強いんだ？」

「あ。まあまあかな・・・。」

まあまあとは言ったが、自分も剣に関しての実力は認めている。全国大会でも何回も優勝したし、大人にも簡単に勝つことはできた。人には1つは才能があるというが俺は恐らく、剣術に関してはほかの人達より才能があるようだ。

ちなみに流派は鬼人流という、力押しの流派に入っていた。この流派の師範代が俺の父親と仲が良く。部活以外で鍛えてもらった。剣道ははじめようと思ったときはそう嫌ではなかった。これも運命と言えるのだろう。

「明奈！。怖い人に襲われたら、隆君に守ってもらいなさい。あんたは見かけは美人なんだから。」

「そうだ。隆は以外と頼りになるからな、以外に。」

以外とは失礼だ。まあ、見た目は普通だしな。否定はできない。

「そういう、明だつて。剣道ではそこまでだけど、三刀流が使える人はなかないぞ。」

そう。明は剣術においては俺にひきをとっていない。一刀流は俺の専門だが、明は三刀流という超難易度の高い剣術ができるのだ。いろんな流派から誘いはあったがなぜか受けなかった。なぜかというと、俺専用の流派を作るからだといいい。結局、どこからもスカウトを受けなかった。ある意味、もったいない。

「へー。こんな頼りなさそうな奴がねー。まあ。私が襲われたら、守って頂戴ね。王子様。」

寛子はおちよくなるような言い方で明に言った。

「お前なんか守るわけねーだろ。俺が守るのは明奈ちゃんみたいな可愛い子だけだ！なあー。隆！」

ここで俺に振るか。返答に困るな。取り合えず、黙秘権を発動しておこつ。

しかし、そろそろ。眠くなってきたな。明日はこのメンバーで施設を回るつもりだし。早いとこ寝て、明日に備えようか。

「そろそろ、お開きにしようぜ。明日は敷地内を回るんだろ？」

明奈は俺の隣でウトウトしていた。今日は疲れたのだろう。

「ダメよ！大人の時間はこれからよ！」

「そうだ！子供は寝ろ！」

明と寛子は妙に気が合うところがある。変なところでの結束性が高い。そんな友人に恵まれた、俺と明奈は嬉しいことなのかもしれない。

それから、部屋に帰る気配がない二人はしゃべり続けた。朝までいるつもりなのだろうか？

隣の明奈はいつのまにか俺の肩にもたれかかって、寝ていた。それをまじまじ見ていた明は変な笑みをこちらに見せていた。

「おい、寛子。俺ら、お邪魔かもしれないから、部屋戻らないか？」

そういうと、寛子もこちらを見て。変な笑みを浮かべた。

こいつら何を考えてんだ。

「そうね。ムフフフ。それじゃ、明奈のことはまかせたわよ。」

二人スタスタと静かに部屋に戻っていた。

嬉しい状況ではあるのだが、初日から。こんな展開があつていいのだろうか？ほかの奴が見たら、さぞ羨ましがらうだろうな。こんな美

少女が俺の肩にもたれかかって寝ているのだ。高校時代は彼女もいなかったし、こんな美味しい経験もなかったから。新鮮だ！俺の中の猛獣が暴れ出しそうだ。

と、まあ。冗談はさておき。どうするべきだろうか？こんなに気持ちよく眠っていることだし、起こすのも悪いかな。

俺としても眠気がかなり来ているので、もたれかかっているベットの上から毛布を引っ張り。二人の足元にかぶせて、ウトウトとしていた目を閉じ。眠りの世界へと入ろうとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101ba/>

スピリットー魂の集う場所ー

2012年1月9日23時47分発行